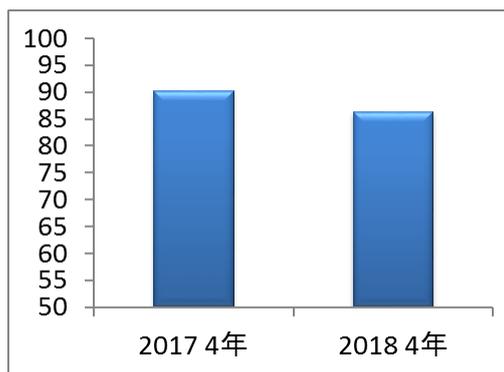


研究代表者	所属学系・職名 外国語・外国文化学系・教授 氏名 佐久間 康之						
研究課題	新学習指導要領の移行期間における英語熟達度の基礎調査：小中接続における認知メカニズム横断的・縦断的研究 Fundamental Survey of English Proficiency in Transition Periods of New Course of Study: Cross-sectional Study of Cognitive Mechanism in Connection Between Elementary -and Junior High Schools						
成果の概要	<p>【本研究の目的と成果の概要】 本研究の目的は、小学生及び中学生の英語力の変遷を縦断的に調査することで、小・中学校における英語教育の効果を系統的に検証することである。具体的には、小学生に対する英検 Jr.と中学3年生に対する英検（3級以上）を英語力の指標とし、言語習得に関わる認知機能の発達状況に関わるデータと併せて考察する。本研究は2014年度からの研究の継続であり、本研究で収集されたデータは、新しい英語教育制度を中長期的に見据えた基礎データとなることが期待される。</p> <p>【調査の実施内容】 上記の目的を達成するため、福島県内 A 小学校の中学年以上と、福島県内 B 中学校の全学年を対象とした調査を行った。小学生に対しては、英検 Jr.（中学年は BRONZE, 高学年は SILVER）を実施した。A 小学校の現状として、半数以上の児童が学校以外で英語を学習しているため、主に学校のみでの英語学習歴である児童（以下、半年未満の学習者）の小学生と学校以外での2年間以上の英語学習歴を持つ児童（以下、2年以上の学習者）に分けるなど、多面的に分析を行うことを検討している。B 中学校に対しては、英検（3級以上）を実施した。英検 3 級は、文部科学省の「第 2 期教育振興基本計画（平成 25～29 年度）」において、50%の中学生が卒業時点で到達すべき目標として掲げられているものである。なお、B 中学校では既に英検 3 級を保持している生徒が一定数いたため、それらの生徒は自身が保持している1つ上の級を受験させた。</p> <p>【成果の概要（一部のみ掲載）】 本稿では本研究の中で最も基礎的なデータとなる英検 Jr（BRONZE と SILVER）について報告する。昨年度も中学年に対しては BRONZE, 高学年に対しては SILVER を受験させており、昨年度収集したデータと今年度収集したデータの比較および考察を行った。</p> <p>1. 3年生のデータ 平均得点率は右図の通りであり、2017年度3年生は84.0（標準偏差9.74）、2018年度3年生は81.2（標準偏差12.7）であった。平均点の減少そして標準偏差の増加が見られたことは、想定外の結果である。A 小学校では、2017年度に引き続き外国語活動が年 35 時間実施されているため、2017年度から極端な変化は生じないと想定していた。今後は、英語学習歴の差などを検討していく。</p> <div data-bbox="874 1608 1380 1973"> <table border="1"> <caption>3年生の平均得点率</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>平均得点率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2017 3年</td> <td>84.0</td> </tr> <tr> <td>2018 3年</td> <td>81.2</td> </tr> </tbody> </table> </div>	年度	平均得点率	2017 3年	84.0	2018 3年	81.2
年度	平均得点率						
2017 3年	84.0						
2018 3年	81.2						

成果の概要

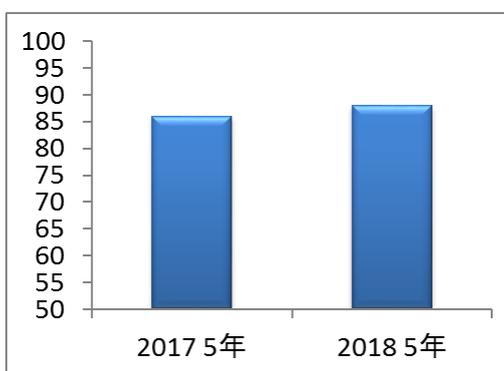
2. 4年生のデータ

平均得点率は右図の通りであり、2017年度4年生は90.2（標準偏差7.7）、2018年度4年生は86.4（標準偏差10.9）であった。平均点の減少そして標準偏差の増加が見られたことは想定外の結果である。4年生も3年生と同様に、2017年度に引き続き外国語活動が年35時間実施されているため、2017年度から顕著な変化は生じないと想定していた。



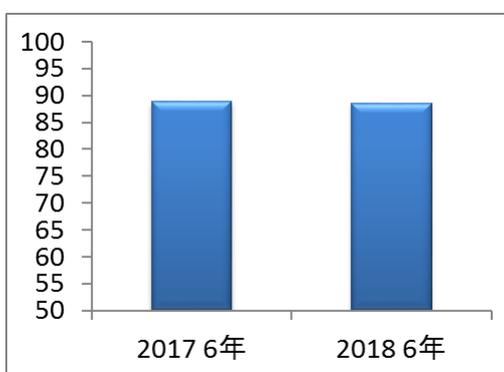
3. 5年生のデータ

平均得点率は右図の通りであり、2017年度5年生は86.0（標準偏差9.3）、2018年度5年生は88.1（標準偏差8.2）であった。やや平均点の増加および標準偏差の減少は見られるが、平均点や標準偏差に顕著な違いは見られなかった。これは、2017年度に引き続いて外国語科が70時間実施されたことに起因しており、想定通りの結果と言える。



4. 6年生のデータ

平均得点率は右図の通りであり、2017年度6年生は88.9（標準偏差6.6）、2018年度6年生は88.6（標準偏差7.6）であった。従って、平均点や標準偏差に顕著な違いは見られなかった。これは、5年生と同様、想定通りの結果と言える。



【本研究の意義と今後の課題】

本研究は、小学校及び中学校における外国語学習の効果に関する基礎データをエビデンスとして収集しており、県内外の小・中学校に対して重要な示唆を与えることが期待される。また、2020年度から新学習指導要領が完全実施されることを踏まえ、新しい英語教育制度を中長期的に見据えた本研究は、当該分野における最先端の研究として学術的な価値も高い。

今回の報告書で一部掲載した英検 Jr.の結果が示しているように、効果的なカリキュラムを模索中の現在の教育体制では、新学習指導要領の実施に伴って児童・生徒の英語能力が必ずしも向上しない可能性もある。例えば、2017年度から2018年度にかけて授業時間数の変更はなかったにも関わらず、小学校3年生および4年生において英検 Jr.の得点が下降している傾向が見られた。

<p>成果の概要</p>	<p>新学習指導要領に向けた教材等の情報提供が進んでいることを考えると、英検 Jr.の得点は変化しない、もしくは上昇することが望ましく、下降した理由について緻密な検討が必要であろう。今後も小学校および中学校における学習者のデータを継続的に収集することで、教育現場における新学習指導要領の円滑な実施を支援していく必要がある。</p>
--------------	---